


KEIO SFC REVIEW



No.
53

Table of Contents

53	02
特集	
研究会 × 研究会	04
連載	
ようこそ、新任教授	18
大木 聖子 環境情報学部准教授	
渡辺 賢治 環境情報学部教授	
おとなりの研究会	24
敵 網林 環境情報学部教授	
上山 信一 総合政策学部教授	
sfcism	28
小島 慎也 総合政策学部 2010 年度卒業生	
When I was young	30
岩竹 徹 環境情報学部教授	
追悼文	
加藤寛先生を悼む	34
曾根 泰教 政策・メディア研究科教授	
高橋潤二郎先生を悼む	36
加藤 文俊 環境情報学部教授	
Abstract SFC REVIEW 53	38
From Editor	40



53

An idea is nothing more nor less than a new combination of old elements.

という言葉があります。

あるアイデアについて私たちが、「これは革新的だ!」と思っても、大抵の場合は過去に誰かが似たようなことをたくさん思いついて、実は私たちはそれらを組み合わせたり、発展させたりしているにすぎない、ということです。

SFC創設時の「志士たち」の想いを振り返ったり、同一の分野の中にさえ存在する多様な視点を照らし合わせたりして、今のSFCのあり方を考えてみませんか。



研究会

X

研究会

SFCにはさまざまな分野の学問が集まり、
それらを横断するような研究を展開している人が多くいます。
しかし、ひとつの分野の中にもいろいろなカテゴリーや区分があります。
分野は同じだけれど、手法やトピックが全く違う人たちは
お互いの研究をどのように捉えているのでしょうか。

異なった研究会に所属している学生同士の対話を通じて、
それぞれの学生が目指しているものや、
その研究をSFCで行う意義などを明らかにします。

建築学 06

小林博人研究会 西山 康史
松川昌平研究会 中村 健太郎

認知科学 09

諏訪正樹研究会 坂井田 瑠衣
今井むつみ研究会 小川 優子

社会科学 12

藁谷郁美研究会 佐藤 友紀子
加藤文俊研究会 大川 朝子
熊坂賢次研究会 加藤 遼

経営学 15

飯盛義徳研究会 松田 華保子
國領二郎研究会 西久保 有里

建築学

中村…学部二年生の中村です。一年生のときから松川昌平研に所属しています。松川研では、建築学の中でもアルゴリズムミックデザインと呼ばれる分野を研究しています。これは、コンピュータの計算能力を建築デザインに応用し、これまで不可能だった建築手法を実現しようとするものです。

僕の問題意識について話しますと、建築はただカッコいいデザインだけじゃだめで、歴史的な文脈がすごく大事なんです。科学や芸術と同じです。僕が問題だと考えているのは、それが嵩じて、学問が対象とする建築と実社会での建築とが乖離してしまっているんじゃないかということです。

西山…小林博人研に所属する西山です。現在、修士課程二年生です。僕は、学部は工業大学の建築学科に在籍していました。建築計画論や建築意匠設計を通じて、現代のマクロな都市問題について考察し、よりよい環境の構想を練るなかで疑問に思うことがありました。現在の建築教育では、建築の企画、施工、使用などの実務に関連することにそんなに触れられないままになっっているんで

す。その中で、建築設計やデザインを考えられるのかということです。僕にしたって、学部的时候はチームで設計していくという連携や建築コストの計算をふくめ、釘の打ち方さえ知らなかった。建築が企画され使用されるまでの一連のプロセスは、学生にとっても建築設計の与条件として構想に深みを与えると思うんです。学問としての建築と建築実務との間に大きな隔たりができています。そういう問題がある気がしています。そのような想いからプロジェクト専攻型のSFCの建築分野に入学することを決めました。

ところで、戦後から近代まで、建築家と言ったらこの人、みたいな人がずっといました。中村君が言うように、彼らが建築の文脈を次々に新しくしてきたわけです。それに対して、現代はそういう人がいないすごくフラットな時代になっています。建築家の役割は多様な環境と必要に応じてオプションを提示することになってきている。そして、最終的にそれらの選択肢の中からどれを選ぶのかは、その建物を使う側の人に任せられる。こうした現状は、現代における建築に対する価値観を多様化させているのだと思います。

西山 康史

(にしやま・やすふみ)

政策・メディア研究科修士課程二年。小林博人研究会所属。学部は芝浦工業大学の建築学科に在籍。プロジェクト専攻型の建築設計プロセスに興味を持ち、政策・メディア研究科に進学。参加プロジェクトとして、コンゴ民主共和国のキンシャサ郊外に小学校を設計・建設・運営するコンゴアカデックスプロジェクトのプロジェクトリーダーとして活躍。



中村…よく分かります。自分もみんなも共通理解できるような、普遍的なデザインなんてものは存在しません。デザイン力だけじゃ太刀打ちできなくなってきたらいいですね。

西山…高度に専門化された意匠論やコンセプトに偏った建築提案は、紙面ではおもしろくても、それにお金を払って、そこを自分の生活の場にするというレベルでは選ばれない。つまり、学生であつても建築設計をとりまく事象を総合的に考え、社会に対してホスピタリティのある建築提案を出していきたい。相手に自然に選ばれるような、そんな説得の仕方を建築家は身につける必要があると思う。

コンゴプロジェクトを通じてデザインを学ぶだけでなく、建築家の職能を広げることに関心があるんです。建築学での私のアプローチは、机上の設計論にとらわれないことを重要視しています。具体的には、コンゴ民主共和国で小学校建築のプロジェクトに参加し、協働者であるコンゴ民主共和国の人との打ち合わせや施工スケジュールの管理、現地での施工、それに広報活動、もちろん設計などを担当しました。その中で

は、相手が一体どういう人なのか、どのような意図を持っているのかといったことを十分に把握する必要が出てくる。そうしたことを汲み取りながら、建築を造っていくことのできる、いわばコーディネート力とも呼べるようなものが、これから建築家の職能の一つとして求められてくるんじゃないかと思えます。この事に真摯に向き合うことが建築設計やものづくりの分野の可能性も拡げることができています。

中村…建築家としてどういうものを作りたいかということではデザインの方向に込められているのだけれど、今必要なのは、そうしたデザイン力に加えて、建てるための条件を上手く自分の方に誘導していく、ある種の政治力みたいなものが要求されるわけですね。確かに、そういう力を身につけないと食っていけないですよね。

それに、デザイン力とコーディネート力という二つの力は、質の高い建築を社会に増やしていくという意味でも欠かせないものなんじゃないでしょうか。これは持論なんですけれど、いい空間を把握する能力は一つの教養だと思っっているんです

よ。我々が空間の良し悪しについて言及できるのは、その尺度が社会的に通用する一種の言語だからです。たとえば、ここは風の通りをより良くしようとか日当たりをちゃんと確保しようとか、そんなふうだね。建築家はそういう空間の言語をよく知っている人だという話です。この教養は、空間という体験にどれだけ意識的に取り組んできたかに左右されるものです。商業主義的で粗雑な建築が一杯の東京の現状は、これまでに、そういうものの教育を怠ってきた結果と言える。少なくとも、空間に対する感覚を真面目に捉えてこなかった、あるいは過度に神格化してきたんだなと思っっています。

西山…そうです。それは日本全体にも言えることなのかもしれない。

中村…ではこの現状をどうすれば変えていけるのか。そのために、建築家にできることがあると思います。実際の社会の中に、個々人が自由に参照できるようなかたちでいい空間を埋め込んでいかなければならない。そのためには、デザイン力とコーディネート力の二つが必要不可欠になっってくる。デザイン力は空間の質



中村 健太郎

(なかむら・けんたろう)

総合政策学部二年。松川昌平研究会所属。松川研では、コンピュータショナルデザインやアルゴリズムックデザインを用いて、建築の新しい可能性を探究している。学問としての建築だけでなく、実社会における建築にも目配せしつつ建築デザインを学ぶ。

のために、コーディネート力はその質をリーダーに変換するためのものです。この二つの力を駆使して、空間言語の貧困さを地道に解消しなければならぬ。

西山…よく分かります。ただ、一つ注意すべきことは、建築学を勉強するのと並行して政治学や経済学を学んでも、建築の現場での政治力にはつながらないということ。だから、建築の現場でそういった力を養っていく必要があると思う。

中村…それはありますよね。建築マネジメント学びたいな。一つ事例を紹介させてもらいますと、「メジロスタジオ」という建築家集団がいます。彼らはまさに、デザイン力とコーディネート力とを兼ね備えた人たちだと思います。「メジロ」は不動産業界で用いられている言葉を使っている、ある集合住宅を造ったんですが、これが一見するとすごく奇妙な、珍しい形態をしている。不動産屋さんで探しても絶対に見つけられそうにない形態です。しかし、もとは不動産言語をベースにしているので、不動産屋さんで家探しをしたことがある人ならば、理解できる空間になっ

ています。建築のリーダーリティに関する一つの典型例と言えるでしょう。

「メジロスタジオ」のように、実社会に適応させつつ、自分の建築家としてのデザインを埋め込んでいくということを用意にやっている人たちがある。翻ってSFCの建築を見ると、取り扱う分野の幅広さ故に、実社会にも、建築それ自体にも目を向けなければならないという葛藤に苛まれると思うのですが、彼らをやっていることはその問題に対する一つの回答なんじゃないでしょうか。

西山…僕が目指しているデザインもそれに近いですね。実社会と違って、大学では経済合理性が建築の評価軸として入ってこない。建物を建築家はデザインで評価するけれど、クライアントもそうであるとは限らない。たとえば、そこから利益を得るために建物を造ろうとする人もいるように、実社会では大学で評価される建築そのものの良さだけが求められるわけではないと思うんです。だから、そのことを意識しないで建築を学んでいると、社会に出たとき、自分のアイデアとクライアントの

要求をどうやってすり合わせて、相手を説得すればいいのかわからなくなる。それで、結局普通のを建ててしまふ。だから、大学の建築教育と社会の多様な価値観にはある程度の差があることを早いうちから意識しないといけませんね。

つまり、自分の夢のある建築提案の持つ強い社会性というものを考えていきたいです。その社会性は日本に留まる画一的ではなく多様なものであるべきです。建築をとりまくあらゆる分野の関連性の中に見出せると思うんです。そのような建築設計が多様な人を巻き込み、より開けた社会インパクトのある環境創造を可能にしているのではないのでしょうか。

中村…最初から続いている問題点は、学問としての建築と実社会でのそれとが明らかに乖離しているということですよ。僕たちは建築家の知見を否定しているわけじゃない。ただ、よく考えられた建築がちゃんと建つような仕組みがあればいい。そして、SFCには、個々人がその仕組みをつくりだすための能力を身につける機会がある。ここにこそ、SFCで建築を学ぶ意義があると思うんです。

よね。まず、僕らが共有したような実社会と建築教育との乖離という問題設定に気付くこと。さらに、気付いて終わりじゃなくて、それを上手く乗り越える答えを見つけなきゃダメなんじゃないでしょうか。

認知科学

小川…私は今井むつみ研にいて、卒論の研究として、幼児における言語獲得のプロセスを追究しています。特に、オノマトベ（擬音語や擬態語の総称）が言語獲得のプロセスにどう影響を与えているのかに着目しています。具体的には、保育園に赴いて、何人かの園児を対象に心理実験を行い、彼らの言語獲得のプロセスを観察しています。実験を行う際には、実験場所や被験者の状態にどうしてもコントロールの効かない部分が出てきてしまいます。ですの、被験者数を増やしたりするなど、統計的な手法でカバーするように心掛けています。

坂井田…私は諏訪正樹研究会に所属しています。諏訪研の特徴でもあるのですが、状況や個人に固有の現象を対象に研究しています。私の場合は、日常生活のコミュニケーションにおいて、生活者たちがどのような振る舞いしているのかを、食卓でのコミュニケーションを例題に研究しています。私は統制された実験環境下ではなく、ある特定の状況下での会話を研究対象としています。非常に個別的な状況で発生する会話です。私は三人の会話を分析していま

すが、三人の関係性やそれぞれの特性、あるいはその会話がどこで行われているのかということが、会話に密接に関係します。食事の場での会話とそうでない会話との違いを考えているという意味では、普遍的な知見を導きたいという思いもあるのですが、知能や認知の研究では、普遍性を求めることだけが必ずしも目的ではない。普遍性を否定しているわけではないんですが、それだけではない、固有性も認めていく必要があるのではないかという考え方をしています。

小川さんにお聞きしたいのですが、実験室実験では、いろいろな面で実験と現実とのギャップがどうしても生まれてしまうと思います。そのため、実験をおして実際の認知プロセスについて知ることには限界があると思うのですが、その点についてはどうお考えですか？

小川…それについては、むしろ、実験を通じて知りうることに限界があるということをも十分に自覚することが大切だと思っています。私たちが目指しているのは、確かに例外もあり得るけれど、ある状況において普遍的なものを見つけていこうとい

うところなんです。そこは、坂井田さんと違うところだと思っんですけど、私は状況すべてを学問として捉えるのではなく、具体的な状況の中の多様な要因を確認しても、そこになお残る人間共通の認知プロセスがあると思っていて、それが私の、そして私たち今井研の見たいものでもあります。

坂井田…方法論や取り組んでいることは全然違うんですが、おそらく大きな目標はそんなに変わらないと思います。人間の認知や知能って何なんだろう、ということを知りたいわけですよね。その中で、一方で、小川さんたちが追究されていることは普遍性や客観性で、私たちが取り組んでいるのは、普遍性を追求するがゆえに漏れ落ちてしまう例外を拾ってあげる作業と言える。だから、両方の立場が存在していないと、知能の研究として立ち行かないような気がしているんですよね。

小川…坂井田さんが、例外までも大事な要素として考えていらつしやるのはすごく素敵だと思っただけですが、やっぱり、一般化するというのが、

は学問としてすごく大事だと思うんですよ。たとえば、特定の三人の間のコミュニケーションを観察して得た知見を、その三人以外のコミュニケーションにどうやって一般化するのかがすごく大事なところだと思っています。例外的要素に関しては、どうやって一般化していらっしゃるのですか？

坂井田：そもそも、私は「一般的」「普遍的」という言葉の定義がすごく難しいと思っています。一般的だとか普遍的だとか何をもって決まるのかと言うと、実は非常にいろんな判断基準があり得る。たとえば小川さんのように、一般化の方法として統計的な有意差を根拠にするということがありますよね。もちろん、それは一つの方法ではあるのですが、別の方法もあると思っています。それは、何か個別具体的な現象についての研究結果を発表したときに、共感や納得感を得られるか、というものです。確かに、共感や納得は自然科学的な意味で一般的と言うことはできませんが、これも学問として何かしらの貢献になり得るのだと思っています。特に私たちが取り組んでいるような、生活に密着した研究では、

統制実験が非常に難しい。そこで、数字以外の媒体が出てくるわけです。

小川：方法という点では、私たちはどちらかというと定量的なやり方で結果を出したいと考えています。というのも、適切な証拠から、適切な推論を導き出す上で一定の基準が必要になるからです。逆に、坂井田さんの場合、定性的なデータを重視していらつしやると思います。その場合、どのように客観性を担保するのかが非常に難しいと思うんですけど、何か気をつけていることなどありますか？

坂井田：そこは本当に難しいところで、当然、定性的な記述は定量的なデータに比べて主観的になりやすい。だからといって、開き直つてはいけなくて、しっかりとした手続きを取る必要があると思っています。たとえば私の研究の場合、ある会話の現象を見て、それに定性的な解釈を与えることは一見すると主観的な手続きなのですが、なぜそうなるかという論理構造が、必ず実際に起きていた現象一個一個に紐づいている必要がある。その論理性に主観的な

飛躍がないかという点を、特に丁寧に考えています。すべての人を十分に納得させるレベルの結果を示すために、非常に緻密な観察をしています。

小川：私たちの研究は定量的なものなので、ある仮説に対して反証可能性をどんどん探つていき、その研究が掲げる仮説の妥当性を探つていくことで真実に迫ろうとしています。一方、坂井田さんの場合、たとえばAが起きてBが起きたその因果を論理的につくるじゃないですか。それが研究結果として妥当であるかどうかはどうやって判断するんですか？

坂井田：我々の場合、例外的な現象に着目しているから、初めから反証はいくらでもあるわけですよね。もちろん明白なこととして、独り善がりなことばかり主張するような研究結果には妥当性がありません。けれども、特定の事象に関してでも、論理的に飛躍がない記述がされていれば、その研究にも妥当性が認められるのだと思っています。

ところで、実験心理学の場合、実験から導き出された結果と自分の実感との間にずれを感じることもある

坂井田 瑠衣

(さかいだ・るい)

政策・メディア研究科修士課程二年。諏訪正樹研究会所属。状況や個人に固有な現象に焦点を当て、食卓のコミュニケーションを例題に、生活者の相互行為を分析している。また、SFCお笑いコミュニケーション研究会の共同発起人でもあり、研究室の垣根を越えた議論の場の構築を目指している。SFCお笑いコミュニケーション研究会 facebook ページ：<http://www.facebook.com/owarai.comm>



そうですが、小川さんの場合はいかがですか？

小川…私たちが知りたいのは認知プロセス、つまり、子どもの言語習得の場合、自分の知らないところで情報処理プロセスがどうなっているかというところなので、それを実験によって観察しようとしています。ただ、コントロールされた実験の中で行われている認知プロセスと、日常的に行われているものは必ずしも同じじゃないということを自覚していなければならぬと思っています。研究は、あくまでも実験の結果から推測された認知プロセスに過ぎないんです。本当のプロセスを直接観察する方法はまだない。だから、現状の研究結果が必ずしも正しいわけではないという姿勢を常にとっていないといけないとは思っています。

坂井田…小川さんは幼児を対象にしていらっしゃるじゃないですか。だから、難しいことに挑戦されているのだなということがよく分かります。幼児はメタ認知ができないので、どうやって言葉を覚えたのかを語ることもできない。だから、観察可能

な彼らの振る舞いから推測するしか、研究のしようがない。実験以外の方法を使った幼児の研究はありえないのでしょうか？

小川…たとえば、家にビデオカメラを設置して、赤ちゃんが生まれてからずっとその発話を記録するなんていう、気の遠くなるような研究もありますね。

ただ、私としては、子どもは何歳に何を喋ります、みたいな事実を述べるだけの研究にはしたくない。事実の先にある真実を見つめることが目標です。先ほど、「直接認知プロセスを見ることはできない」と言いましたが、とはいえ、いろいろな研究の中で、何人もの研究者が反証できない、これは正しいかと思える研究がいくつもあるんですね。それをパズルみたいにつなぎ合わせることで、赤ちゃんが生まれてから言語を獲得するまでのプロセスが、少しずつ見えてきている。一人ひとりの研究はすごく細かいことばかりなんですけど、それらをつないでいくと、赤ちゃんってこうやって学習をしているのかも！というのが何となく見えてくる。そこがすごくおもしろいところだと思っています。

坂井田…私の話を聞いてくださる小川さんは、ご自分の方法論と異なる方法でも、理解しようとするべく努めてくださっているように見受けられます。ちょっと話は変わりますが、方法が対立したときに、研究者同士がどう対話したらいいのかということとは、実は重要だと思っています。さつきも言ったように、大きく言えば、人間の知を解明したいという目標は同じはずなんだから、本来であれば、方法が違うために相手に対して排他的な態度をとることは生産的ではないはずです。それに、相手の方法論を否定しているうちは、研究内容の議論に入れなくて、対話が進まないじゃないですか。そういう意味では、小川さんとの対話はすごく有意義だったと感じました。

小川…私の感覚としては、やっぱり二人とも着目している部分は全く違うけれど、人間やその認知について知りたいという志向では一致している。だから、認知の領域がどれだけ広いのかを実感しますね。

坂井田…そうですね。だからこそ、お互いの方法を認め合い、学び合うような姿勢が重要になってきますね。



小川 優子

(おがわ・ゆうこ)

総合政策学部四年。今井むつみ研究会所属。幼児の言語獲得プロセスに注目し、オノマトペが幼児の言語獲得プロセスに与える影響というテーマで卒論を執筆している。人間に普遍的な認知プロセスの解明を目標に、批判的な態度を堅持しつつ、研究に励んでいる。

社会科学

加藤…熊坂賢次研の加藤遼です。僕

は情報によって拡張されている現実に興味があります。みなさん、SNSを使ったり、ネットでいろいろなものを検索したりしますよね。それに、何かちよつとした判断を下すときでも、意外とネットで得た情報を頼りにしていることが多い。そうした、ネットの情報が現実に影響しているということに関心があります。

問題意識は、情報が都市にどのような影響を与えているのかということで、研究もそれに関することをやりたいと考えています。

佐藤…佐藤友紀子です。藁谷郁美研に所属しています。研究は、メディアと言語の分野において、東日本大震災に関する日・独・英の新聞報道を二〇一二年の記事から遡って収集して、それらの比較を行っています。また、報道の内容と人々が実際に思っていることとの間には乖離があるだろうということで、インタビューも行っています。

問題意識は、同じテーマでも国ご

とに報道の仕方が大きく違うというところにあります。たとえば同じ事件であっても、国によって報道の内容、使われている単語や造語などに差が見られます。私はそうした報道のされ方の違いに焦点を当てています。一つの国の報道にしか目を向けない場合、私たちの世界観はかなり狭いものになってしまいます。なので、複数のメディアを異なる言語で比較することによって、自分と世界とを相対化する必要があると思います。現在の研究を行っています。

大川…加藤文俊研に所属している大川朝子です。人と人とのコミュニケーションや、ある場とそこにいる人々の行動の関係に興味があります。今、私がしている研究のきっかけとなったのは、研究会でのフィールドワークです。フィールドワークをとおして、私たちの身近にあるのに、意外と見落としてしまっているものがたくさんあることに気付かされました。私にとつてその経験はすごく刺激的で、自分と同じような経



佐藤 友紀子 (さとう・ゆきこ)

総合政策学部四年。藁谷郁美研究会所属。同じテーマであっても、国によって報道のされ方が異なることに着目する。研究として、メディアと言語の分野において、東日本大震災に関する日・独・英の新聞報道を収集し、そこで用いられている特定の言葉に焦点を当て、比較分析を行っている。



大川 朝子 (おおかわ・あさこ)

環境情報学部四年。加藤文俊研究会所属。研究会でのフィールドワークをとおして、自分たちの身近にあるにもかかわらず、意外と見落とされているものがあることに気づかされる。そうした自身の経験をもとに、銀座を事例に街の意外な一面を発見し、人々に伝えようと試みている。

験を他の人にもしてもらいたいと思
い、今の研究をはじめました。

具体的には、銀座を事例に、街に
ついて、みんながその街に対して抱
いているイメージとは違った一面を
示すことができればと思っていま
す。

佐藤…三人とも、実際に目に見えな
かったり、普段は見落としたりして
いるものがありそうだと考え、研究
によつて、それをはつきりと見える
形で示そうとしているところが共通
していますね。

加藤…でも、使っている研究手法は
大分違うようですね。うちの研究会
では、情報がすべて、といったところ
があります。社会のリアリティを
捉えるための情報が、今はネットの
中にある。そこで、まずはインター
ネット上にある情報を大量に集めま
す。次に、集めてきた情報を計量分
析にかけて、情報の構造をつくる。
ここで、統計そのものが眼目である
研究では、分析の結果がほとんどそ

のまま研究結果になると思うんです
けど、うちの研究会では分析の結果
に社会的な解釈を加えていきま
す。社会的なフレームや想像力、
あるいは自分の経験などを利用し
て、データから引き出せることや他
の事柄との関係を探っていくん
です。

大川…私の場合、私自身というより
も、私が所属している研究会自体が
質的調査の方がつつりと寄ってい
ます。私は追跡調査みたいなことを
していて、特定の人間の行動を記録
したり、写真に撮ったり、通った道
をメモしたりしています。そして、
そうやって集めてきた材料に考察を
加えて、こういう感じの人はこう
いった行動をとりやすいというよう
な分析をします。

佐藤…私は、日本語とドイツ語、そ
して英語の新聞報道で用いられてい
る言葉を分析していて、特に、使わ
れている言葉の背景に注目して考察
しています。たとえば、この言葉に



加藤 遼 (かとう・りょう)

総合政策学部四年。熊坂賢次研究会所属。情報によって拡張された現実に関心を持ち、特に、情報が都市に与える影響に注目する。ネット上から収集した情報を基に、統計と社会的な解釈の両方の手法を用いて、社会のリアリティを捉えようとしている。

は宗教的要素が絡んでいるとか、この造語はいつ頃に造られ、その裏側には政治的な問題があったとか、そういう感覚です。

また、先ほども言ったように、日本学を学ぶドイツ人の学生にインタビューもしています。

加藤…これは僕のイメージですけれど、もし主観と客観という区別をするのであれば、多分大川さんの研究は主観寄りで、佐藤さんの研究では客観性がすごく重要だなと感じました。実は、僕を含めうちの研究会では、そのどちらとも言い切れないところをすごく重要視しているんです。さつきも言ったように、僕たちの集める情報はインターネットの中にあります。ネットにある一つひとつの情報それ自体は人の主観から出ているじゃないですか。その一方で、そうした人の主観がたくさん集まったときに生まれる共通性や違いは客観的なものと言える。そうすると、ネットには主観と客観に加えて、そのどちらとも言い切れない世界もある

ることになる。僕たちは、そうした純然たる主観でもなければ純然たる客観でもないところに注目しています。

佐藤…なるほど。でも、私の場合完全に客観的かと言われると、そうじゃないところもあります。たとえば、新聞記事からある言葉や造語を抜き出すとき、言葉の選び方には主観が入り込みやすいと思います。

私は、一方では新聞記事から特定の言葉を収集し、それを分析するという定量的な手法を用いています。他方で、インタビューという定性的な手法も用いています。私の実感としては、定量と定性の両方の手法が重要なんじゃないかと感じています。

大川…確かに、社会は複雑ですし、どちらか片方だけでは限界があると思います。

加藤…それは僕も思います。僕の場合、最終的には主観的な解釈を加え

ますが、まずやることはデータを集めることです。次に、集めてきたデータを定量分析にかけて構造をつくる。そうしてつくられた構造や関係は全部数値で表されます。その数値はリアルを表現していると言えるじゃないですか。でも、数値だけじゃ分からない部分も確実にある。だから、データだけじゃ分からないところを定性的に見つけることも重要です。

うちの研究会では、同じデータを見ても先生と学部生の解釈では雲泥の差がある。だから、定量的な結果から定性的な解釈を引き出すことも大事ですし、その逆も言えると思います。誰でも思い込みや仮説といった主観的な分析を予め持っていますよね。でも、思ってもみなかったことが定量的な分析の結果として現れることもある。なので、きつと主観的な解釈と客観的なデータは相互作用的な関係にあつて、その両方が必要なんじゃないでしょうか。



経営学

西久保…國領研の西久保です。國領研にはITの分野で実際に起業したいとか、それを研究したいという人が多いんだけど、私は輪読で海外の文献を読んでいるうちに、アメリカのベンチャー文化について日本でも本当に有効なのか？ということに疑問に思ったんです。

もちろん、ベンチャーを否定しているわけではない、世界の流れとしてもベンチャーは必要だとは思っただけで、日本のベンチャー企業って二、三年で倒産しちゃうケースがとても多い。だから、日本で経営をするにあたって大切なことや日本がベンチャー企業を受け入れるためにできることについてというのがあるんじゃないかな、と思って研究しています。

具体的には、今までファミリービジネスを続けてきて、そのまま家族経営を続けようとしている老舗の企業と、家族経営をしていたけれど、M&A（自社の売却や他社の買収）をして会社を売却した二つの事例にフォーカスして、家

族経営のいいところ、M&Aのいいところ、を両者の比較から研究しています。

松田…同じく四年生で、飯盛研の松田です。飯盛先生は地域をフィールドに、経営学の視点を取り入れようとしていて、研究室の学生も多くの人が地域の研究をしています。飯盛先生のもとに、地域に関する委託研究がたくさん来るんだけど、私はその中で福岡県八女市^{やめ}という場所の委託研究をずっとやっていて、卒業研究も八女市で私が行ってきた活動を整理して書こうと思っています。だから、西久保さんとは違って、私は研究テーマよりも先に研究対象が決まっていた。

研究の内容としては、住民の主体性がどのように醸成されるのか、また学生が地域に入ること、新しいコミュニティやつながりは生まれたのか、生まれたとしたら、それはどのようなものか、ということを探っています。



最近では先生ご自身はそういった地域でのプラットフォームの設計のいろいろな要素の中でも、境界線をどう引くのかについて、さすがに興味があるらしい。たとえば、先生が運営している「鳳雛塾^{ほうちゅう}」っていうNPOがあるんだけど、この活動に参加する人は一定の資料を読み込む必要がある。資料を読むだけだから、ハードルは低いように思えるんだけど、それでも境界線はあるわけです。そうやって、プラットフォーム設計の中でも、どこにどういう境界線を引くのかっていうことが先生は最近気になっているみたい。

西久保…私がファミリービジネスの事例として扱っているのは海苔屋さんなんですけど、今のところインタビューした限りだと、別に息子に渡そうと思ってるわけじゃないみたい。こいつに継がせよう、みたいな瞬間があるのかと思うたら、どうやらそういうのはいらない（笑）。家族ですつとやっ

きたから、継ぐ方がなんとなく、ああ自分これ継ぐんだろうなっていうらしくて。俺は海苔屋さんになるだろうなっていうことを思いながら生きてきて、父親が社員や取引先の人を家に連れてきて、喋ったり、飲み食いしているうちに海苔屋のマインドみたいなものが形成されていくんだって。境界の中にいるうちに、自然とその境界に留まったというか。

もちろん、経営者によつては息子に絶対に継がせたいって思っている人もいると思うんだけど、どうやら企業が老舗になればなるほど、そういうのはあんまりないらしい。ごく自然に継いでいくというか。

松田…それはおもしろいね。ファミリービジネスを継続するために強い意志があると思っていいたら、それはなかったんだね。

それも地域とすごい似ているところがあつて、Uターンとかインターンとか、最近では自分の出身の地域に戻つて、地域での生活を志す人

が結構多い。そういった、家族経営の会社に対する愛着と特定の地域に対する愛着の間にはなにか共通するものがありそうだよ。

西久保…私はテレビドラマの『あまちゃん』にすごいハマっちゃったんだけど、ああいう地元活性化のムーブメントって最近流行つてるよね。私はあんまりそういう地元に対するノスタルジーは感じないタイプの人で、すごいドライに考えれば、地元に住続ける必要って別にない。そこにノスタルジーとか、記憶とか、受け継がれたものがあるから、居続けたい、残したい、守りたい、みたいな思いが生まれてくると思うんだよね。

松田…私が地域に興味を持つようになったのは大学からで、それまではずっと途上国の開発や支援にずっと興味があつたの。でも今振り返ってみると、地域に興味を持つたきっかけは自分のアイデンティティの変化だと思う。私は岐阜の

松田 華保子

(まつだ・かほこ)

環境情報学部四年。飯盛義徳研究会所属。自分自身もそこで活動をしている八女市元気プロジェクトを事例に、住民の主体性がどのように醸成されていくのか、どのようなコミュニティが形成されるのかに焦点を当てた研究を行っている。



出身なんだけど、人って自分の意識する時間と空間の中でしか自分を相対化できないから、その中で自分しかない。だから小学校時代の私はそこまで自分の地元を意識したことはないけれど、名古屋の中学に入ってから、自分が

岐阜出身であることをすごい意識したし、世界観や価値観が変わった。さらに、大学に入ってから、関東に来たから、自分のアイデンティティが広がって、東海出身の人だっていうふうに変ったのね。もちろん、世界観もさらに広がった気がする。さらにスケールを広げて、海外に行ったときに、「私は東京の出身です」って言わないじゃない？だから今度は海外に行くと

日本を守っていききたい、みたいな感覚になるのかなって思った。本当に大きな時代背景としては、グローバル化が背景にあるのかなって思うな。モノ、ヒト、カネが動けば動くほどローカリゼーションの動きが強くなるのかなって。会社でも同じことが言えると思う。

そうやってUターンやIターンする人が増えてくると、今まではあんまり変化のなかった地域もちよつとずつ変わって、革新性が出てくるのかな、とは思うな。

西久保…企業や地域って資源が眠っていることが多いよね。それも境界の内側の人たちはそれがあることが当たり前だと思っていて、それに価値があることに気づかない。境界の外からやってきた人たちがその価値ある資源に気づいて、それが新しい地域ビジネスやなんらかの革新性につながるというよね。



西久保 有里

(にしくぼ・ゆり)

総合政策学部四年。國領二郎研究会所属。家族経営を続けている老舗企業と、家族経営をしていたがM&Aを選択した企業との比較研究を行い、日本で起業を行おうとする企業のために、両者の折衷案を模索している。

ようこそ、新任教授

毎年、SFCにはさまざまな分野の教員が着任する。

新たにSFCにやってきたのはどのような教員だろうか。

今号では、地震学者の大木聖子准教授と、漢方医学を専門としている渡辺賢治教授の二人を紹介する。

大木 聖子

(おおき・さとこ)

環境情報学部准教授

専門は地震学、防災教育



——大木先生は地震学をご専門になさっていますよね。でも、地震学って一体どういう学問なんですか。

一言で言えば、地震という現象を物理や数学を用いて解明する学問ですね。なので、一般の方がイメージするいわゆる直接的な地震予知の研究はやっていないと言っているでしょう。間接的にいざれ寄与することはあったとしても。そもそも今の科学では、地震予知は極めて困難です。一般の方が地震学という言葉聞いてイメージすること、実際に

やっている地球物理学としての地震学とは大分違うと思います。

私たち地震学者はその事実を一般の方に対してきちんと説明してきました。大きなギャップが存在したまま、国費で研究がなされていく。私の中でこの違和感が積み重なって、研究対象が地震そのものからだんだんと人間に移ってきました。それが、私と他の多くの地震学者との大きな違いだと思います。

数式も使わなくなつたし、地球じゃなくて人間の方を見ている。そ

ういう私の姿をピュアな地震学者じゃなくなつたと表現する地震学者もいます。でも、たとえば子どもが生まれたら、誰だつてその子どもの命を守りたいと思いますよね。地震から人の命を守りたいという、そういう気持ちを受けとめるのが地震学だと捉えるのが自然です。言葉は専門家だけのものではありませんから、一般の方がイメージする地震学と違うことをやっていて、しかもその違いを説明しようとしないのであれば尚のことです。

SFCに来ようと思った理由は、新しい枠組みの地震学をやりたいからです。たとえば、どういうデザイン防災用具なら人々が思わず使いたくなるのか、子どものための防災教育はどうあるべきか、あるいは教育や耐震化に関する国の政策の課題などもそこには含まれます。単に地震そのものを解明するだけではなく、そういったことも含んだ新しい地震学をSFCでつくっていきたいと考えています。

——地震学の道を志したきつかけは？

直接のきつかけは、高校一年生のときに阪神・淡路大震災が起こったことで、そのときに地震学者になろうと決めました。日本で地震の研究ができるところはほとんど旧帝国大学だけだったので、そこに行くための努力をしました。なので、地震学一筋ですね。

間接的なきつかけとしては、中学生のときに地震学者が書いた本を読んだこと。阪神・淡路大震災を目的の当たりとして、なぜ看護師や建築家ではなく地震学者だったのか、と考えると、その本の影響が大きかったことを実感します。

——研究対象が地震そのものから人間に移り変わったのには、何かきつかけがあったのでしょうか。

きつかけは、博士論文を執筆している頃に起きた新潟県中越地震です。阪神・淡路大震災をきつかけに地震学者を志したのですが、研究を

進めていくうちにいろいろなものに関心が移っていき、結局、阪神・淡路大震災の頃の初心をすっかり忘れてしまっていました。そんなとき、いきなり同じような災害が新潟県で起きた。そして、地震が起こって実際に活躍したのはボランティアの人たちで、苦勞してずっと地震学をやってきた自分は何もできませんでした。その時はたと、私は何をやっているのだろうかと思って、地震学を続けるのが嫌になってしまったんです。もう地震の研究をやめようと思っただけに、たまたま目を通した新聞記事が私の考えを大きく変えました。

それは地震で家が倒壊して、亡くなった女の子の記事でした。その子の家は、最初の地震では残ったのだけれど、余震で倒壊してしまいました。余震の直前、その女の子はちょうどお風呂に入っていて、おばあちゃんが入浴だけでも着けて出てきなさいよと言ったそうです。そのあと、余震で家が倒壊して、その子は下着を着けたまま瓦礫の下敷きになっていました。つまり、下着なんか着けずにバ

スタオルで体をくるんで、すぐ外に連れ出していけば、その子は助かったんです。その新聞記事は、そのおばあちゃんが自分の呼びかけを責める言葉の引用で締めくくられていました。

家が古くなっていれば、たとえ本震でもちこたえても、余震では倒壊の危険性があるということは地震学では常識です。こうしたこと、つまり余震も危険だということをご自分で聞いて知っていれば、おばあちゃんには、すぐに出てきなさい、と言ったと思うんです。だから、その女の子は、そういうことを伝えてこなかった地震学者も含めてみんなのせいで亡くなってしまった。でも実際には、おばあちゃん一人が責任を負ってしまった。その事実には受け入れがたかった。そして、その子の命をどうやってこの先の未来に活かしていけばいいのかを考えるとき、地震学者だからこそできることがあると気づきました。自分が地震学をずっと勉強してきたなかで得た知見を一般の方にも伝えれば、家の補強や引越しを検討してくれ

るかもしれない。新潟中越地震がきつかけで、地震学の知見を伝える人になろうと決意して、再び地震学の研究に戻りました。

でも、東日本大震災が起こって、結局、人間は地震が起きたら津波が来るということを知っていても、逃げられないということを思い知らされました。東日本大震災までは、地震が起こったら津波が来るメカニズムはこうですよ、だから、高台に逃げましょうということを一所懸命伝えていた。でもこれは、赤信号は止まれですよ、青信号は進めですよというのを分かりやすく言っているのと同じで、そんなことはみんな知っている。それなのに、毎日交通事故が発生している。それがなぜなのかを考えるべきだった。東日本大震災をとおして、知見を伝えるだけでは足りないことに気づかされたんです。

まだ明確な答えは見つかっていませんが、少しずつ分かってきたことがあります。たとえば、普通に呼びかけても大人は全然行動しないけれど、子どもや孫のためになると分か

ると、途端にやりはじめる。反対に、子どもは新しいこともその意義などを考えたりせずに、おもしろがつて積極的にやつてくれる。今は一つずつ段階を踏んで進んでいる状態です。

——研究会（ゼミ）ではどのような活動をされていますか。

春学期は、研究会の学生に、防災にはいろいろな側面があるということとを伝えたり、私が防災教育を行っている学校の現場に来てもらったりしました。今後の計画としては、SFCで防災を学ぶことの意義を踏まえ、より実践的なことをしていこうという感じですね。夏休みには、希望する学生を東北に連れて行きました。二日間、被災者の経験した苦難を聞いたり、多くの子どもたちが亡くなった場所に連れて行ったりしました。学生たちは自分たちの無力感にしばらく沈んでしまいましたね。でもそこから始まるんです。秋学期の初めに、各自が行った場所の中で印象に残ったところを何点か選んで掘り下げ、グループごとにまとめて

発表してもらいました。その成果はウェブサイトで公開しようと思っています。そうすることで、よその研究会や授業で東北に行く際に、私たちのつくったものがヒントになればいいと考えています。

——他分野とのコラボレーションは何か考えていますか。

三つほど考えているものがあります。一つ目はITと防災です。人間の情報というものに対する認知はたいへん興味深いんです。たとえば情報がないという状態に耐えられないがために、デマや流言が起る。情報がないくらいなら嘘でもいいから情報で脳を埋めておけ、ということなのでしようね。一方で人と情報をシェアしたいとも思っています。こういったことを踏まえて、ITを活用したプラットフォームを作りたいと思っています。

二つ目はヘルスコミュニケーションの適用や応用です。私は今まで地震について分かりやすく伝えようとしてきました。でも実際は、地震に

ついて知つていても逃げるのができない。これは医療に似ているところがあります。身体に悪いと分かっているけど、止められない。知識の有無だけによらないということと、命に関わってくるということ、ある段階での意思決定が必要になってくるということなどが共通点として挙げられると思います。防災行動を促すコミュニケーションとして、ヘルスコミュニケーションから学べるものが多くあると思っています。

三つ目はコミュニケーション評価論分野との協働です。熱心に防災教育に取り組んでいる学校とそうでない学校というのは、外からは見分けがつかない。もちろん保護者も分からない。いつ分かるかということ、災害が起きて犠牲が出たときです。そこで、ミシランのように、教育の観点から学校を星付けすれば、正当な評価を受けたり、目標が見えたりするのはないかと考えています。教育の取り組みを評価するのはコミュニケーション評価論などに近いので、その分野の先生方に教えていただけたらと思っています。

——SFC生の印象はいかがですか。

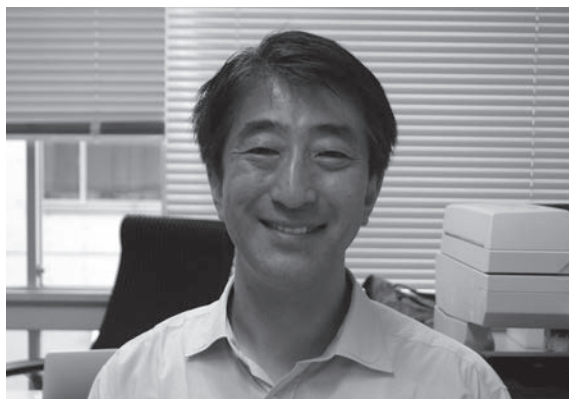
物怖じしない感じがすごく気持ちいいですね。また、コミュニケーション能力に長けているとも感じます。たとえば、分からないことは分からないと隠さずに言う。そんなに簡単に開き直るなよ、と思うときもあるけれど（笑）、そういつたところは本当に清々しいです。

それに、みんなとてもユニーク。私が担当している講義でも、私が思いもつかない発想をしてくれます。まじめさはピカイチな学生と触れ合ってきた私にとって、そうしたことは本当に新鮮でした。SFC生は天才だなと思いました。

ただたまに、どこか生き急いでいるような印象も受けます。周囲に早くからやりたいことが決まっている人が多いからだと思うのですが、焦る必要はありません。大学生の間は、自分の脳が喜ぶことは何なのかを考えつつ、いろいろとチャレンジしてみるといいと思います。

最後に、みんなには多くの活動を

同時に漫然とやるのではなくて、しっかりと切り替えながら集中して行きます。SFCでは授業中にパソコンを使うことが認められているので、他のこともできますよね。でも、何かをしながら別のこともするという習慣がつくと、だんだんと、他のことをしていないことが損だという感覚になってきます。目の前のことに集中することから得るものは大きいのに、そのチャンスをどんどんなくしている。もったいないな、と思うことがあります。SFC生だからこそ、そうしただけをつけて活動できる人になってほしいと思っています。



渡辺 賢治

(わたなべ・けんじ)

環境情報学部教授

専門は漢方医学、ヘルスインフォマティクス

—— SFCに着任されるまでの経歴を簡単に教えてください。

出身は慶應の医学部です。医学部では内科の教室に入って、一型糖尿病という若年者に起こる糖尿病を専門に研究し、博士号を取りました。その後、スタンフォード大学に留学し、遺伝子の研究を行いました。スタンフォードから戻った後は、もともと、漢方医学をやりたくて医者になったということもあって、北里研究所の東洋医学総合研究所というところに行きました。そこは、当時日本が一番、漢方の勉強ができる場所だったんです。それから、慶應の医学部にも漢方のセンターができたので、そこに移りました。そして、この二〇一三年の四月にSFCに着任したわけです。

—— 漢方医学をされたくて医者を志したと仰っていましたが、それはなぜですか。

強く影響を受けたのは、学生時代にやっていた少林寺拳法の先生です

ね。その先生がものすごい人で、剣道の胴なんかを軽く蹴っただけで割ってしまう。でも、本人はそれに平然としている。あるとき、そのすごい先生がさりげなく手を動かしながら、どんなに科学が発展して、ロボットが進歩しても、こういう複雑な動きは絶対できないだろうということ saying it. So from medicine, I pointed out that,少林拳法を通じて学んだ東洋思想の中で、現代科学に説明できないようなものが東洋にあると感じたんだよね。そうして、漢方をやろうと思うて医学部に入りました。

—— 先ほどの話ですと、医学部では内科を専門にされていたと……。ということは、初めから漢方を研究されたわけではないのですか？

それも非常に示唆に富む話なんですけど、私の尊敬している漢方の先生に、漢方の勉強の仕方も含め、人生のいろいろな局面で指導してもらったんです。そして、その先生から、東洋医学を学びたいなら、まず西洋

医学をきちんと修めなさいと言われてた。つまり、「反対学を学べ」ということですね。何かをやりたい場合は、それとは反対のことを勉強すると、自分が本当にやりたいことが見えてくる。逆に、初めからやりたいことの中に飛び込んでしまうと、自分が本当にやりたいことが分からなくなってしまうということです。そういうわけで、内科行けとか、博士号取れとか、留学しろとか言われているうちに十七年経ってしまった。でも、今振り返ってみると、そうしていろいろな経験を積んで、最後に漢方に来たということが今の自分に活かしていると思いますね。

——ところで漢方って、どんなものなのですか。

まず、漢方はね、日本独自の医学なんです。漢方の原型となるものは六世紀あたりの古代中国から日本に伝わってきたものなんだけど、当然、日本と中国とでは採れる原料が違います。だから、日本の材料を使い、日本人の気質に合ったように漢方を組

み立て直していった。そうした作業が綿々と続き、江戸時代に特に日本化が進んで完全に日本独自のものと言えるようになった。また、今の日中韓の医療制度の違いも、漢方を日本独自の医学としている。すなわち日本では、医師免許は一つで、西洋医学を修めた人だけが伝統医学を行っている。中国や韓国では西洋医学の大学と伝統医学の大学とが分かれていて、医師免許が二つある。こうした点も、日本の漢方と中国や韓国の伝統医療との大きな違いですね。

治療の仕方について西洋医学との違いを挙げるとすると、それは二つある。一つ目の違いについて簡単に言うと、西洋医学は病気を治す。病名が決まっています、その病気を叩くというのが西洋医学なんです。それに対して、漢方医学の場合には、病気というよりも、その病気を持っている人を治す。たとえ同じ病気であっても、人によってその反応はさまざまなんだよね。たとえば、同じ高血圧という病気に對しても、西洋であれば血圧を下げるお薬を出しましょうとなるのに対して、漢方の場

合には、それぞれの人間に合わせた薬で治しましょうというふうになる。

もう一つは、西洋と東洋とでは病気そのものの捉え方が大きく違うということです。西洋の場合は患部そのものをピンポイントに見るんだよね。だから、頭痛にはこの薬、むくみにはこの利尿剤といった具合でそれぞれの症状に対して薬が出る。でも、実際のところ人間の身体は複雑系、つまりシステムで動いている。漢方の場合はシステム全体を見て、一つの薬で対応する。だから、異常のあるシステムを治すことによつて、頭痛だけでなく吐き気やむくみといった関係のあるものがいっぺんに治る。この二つが大きな違いです。

——SFCに来ようと思つた理由を教えてください。

SFCに来た理由ですが、漢方は次のような医者との区別があるんですよ。下の医者は病気を治す、真ん中の医者は人を治す、そして上の医者は国を治すというものです。私は

臨床が好きで、医療の現場で、日々患者さんと向き合つて、患者さんのために全力を尽くすことは自分の天職だと思っています。しかしそれに特化するのには、今自分しかできないことをやり遂げて、引退してからでいいかなと思つたのです。今自分がやらなきゃいけないことは、国のプロジェクトや審議会、またはWHOなどを通して、漢方を活用して国や世界に貢献することだと考えたいです。

そうした自分の夢を実現させようと思つたとき、いろいろな分野の先生と幅広く交流できるSFCという場所は私にとってぴったりだった。これからはじまる未来創造塾は日本がやるべきことを発信していくことができる場です。その中で漢方を使えば日本の社会や医療を変えることができるのではないかと。つまり、ツールとしての漢方を提供したいと考えたわけです。医学部のように医療が中心になつていっている世界ではなく、もつと幅広くいろいろなものがある社会の中で、漢方というツールをさまざまなところに提供することに

よって、世の中を変えていく。そうしたことを夢見て、SFCに来ました。

——SFCではどんなことをやろうとお考えですか。

たとえば、漢方というツールを使っては予防・医療・介護をつなげることです。予防・医療・介護は制度上別立てになっていますが、市民の目から見るとシームレスにつながったものです。このシームレスな人間の一生の中のごくにおいてでも、漢方を役に立てられるツールの開発をしたい。それが目下のところ、私の最大の研究課題です。

これからは患者さんが病気になるのを待って、それを治療するというモデルは確実に崩壊します。現在、国家予算の三分の一が社会保障費で占められているけれど、二〇二五年には、国家予算の半分が社会保障費になってしまふと言われている。そして、社会保障費のほとんどは高齢者医療に割かれている。日本では皆保険制度があるから、誰でも平等に

医療を受けられる。しかし、この制度は、多くの若者が一部の高齢者を支えるという正三角形のピラミッドのときにしか成り立たない。けれど、今は逆ピラミッドになってしまっている。現在日本は超高齢化社会に入っていて、もうすぐ高齢化率は三割を超えるということも言われている。つまり、三人に一人が六五歳以上という中で、どうやってこの社会を維持するのかという抜き差しならない問題がある。加えて、高齢化率五〇パーセントを超えた限界集落もあちこちに出現してきているし、この首都圏に超高齢化が向こう十年で起こることが予想されている。こうした社会をどうやって支えるのか。それは予防によつてです。高齢者がいきいきと生きることのできる社会をつくりあげていくためには、病気になるからどうにかしてくれというのではなくて、もっと早い段階から予防を考える必要がある。漢方には「未病を治す」という言葉があります。この考えにのつとつて社会に貢献したい。

そのために、漢方医学の特徴であ

る個別化医療のツール作りをやっています。漢方は個人個人が違うということを前提にしている個別化医療です。それで現在、問診や診断というのは、わざわざ病院に来なくても、コンピュータが医者と同じものを八割から九割くらいの精度で行うことができます。それを活かして、病院に来るような病人じゃなくても普段から自分の体質を知って、どう対処すればいいのかということに気をつけてもらおうということをやりたいと考えています。診断の精度を上げるために、診断結果をフィードバックし、そのデータをデータマイニングにかけ、その人に合った個別化の指導をしていきたいと思っています。

——SFC生の印象はいかがですか。

自由な雰囲気がいいですね。一方カリキュラム編成の影響もあると思うのですが、少し気になるのは、自分のやりたいことが見つからずに自分探しをしている人もいるように思っています。私としては、いい意味でもうちよつとんがった学生であつて

ほしいなと思います。もちろん、思ったことがうまくいかないときもあると思うのだけれど、学生なんだから、うまくいくかどうかは考えなくてもいいと思う。失敗してもいいから、日本の社会を変えてやろうとか、ここから何かを発信してやろうとか、そういう気概を持った学生がもつともつとこのキャンパスを活性化していくことを望んでいます。

おとなりの研究会

さまざまな分野の学問が学べる総合政策学部と環境情報学部において、研究会（ゼミ）はカリキュラムの中心だ。学生は授業で幅広く諸学問に触れ、そして研究会でそれを掘り下げる。当然、学生にとって研究会選びは自分の方向性の選択に他ならず、非常に重要だ。このコーナーでは、数多いSFCの研究会のうちから二つを取り上げ、各担当教員にどんな狙いを持って研究会を運営しているのかを聞いた。



葺網林

(げん・もうりん)

環境情報学部教授

専門は地理情報科学、都市・地域環境、持続可能科学

——研究会のテーマを教えてください。

研究会のテーマは広く言うと「持続可能な発展」で、自然や社会などのさまざまな変化に耐えられる社会やシステムをつくったり、地域の環境条件に合わせて、どのような発展が可能かを考えています。最近の事例だと、被災後どのように復興するのか、安心や安全な社会をどうやってつくるのか、といった内容です。これは以前から取り組んできたテーマなのですが、東日本大震災以降、日本政府も「Resilience Island」、すなわち「回復力がある社会」をつくる、というのを掲げていて、社会的にもこのテーマが注目されるようになりました。

具体的に言うと、現在は、防災と震災復興、気候変動、再生可能エネルギーの三つのトピックに取り組んでいます。各トピックごとに、空間情報や地理情報を用いて、問題をリサーチし、なんらかの解決方法を提示して、実際にその方法の有用性を検証してみる、ということをやっています。

います。たとえば、再生可能エネルギーの場合、福島での原発事故以来、分散型、再生可能、住民参加、スモールビジネス、というようなキーワードが出てきています。そういうキーワードが参加可能で、持続可能なビジネスモデルを探しているんです。実際に群馬県の太田市、宮城県の気仙沼市などの地域で実践しているんですが、自治体もNPOも非常に關心があるのが分かります。

正直言って、儲かるかどうかはまだ分かりませんが、市民から基金を集めたり、国の固定価格買取制度を利用したりすることはできます。また農地であれば、80%の生産高さを保てれば、ソーラーパネルを設置することだってできます。ただし、地域によって日射量や遮蔽物の有無など、条件が違うから一概にソーラーパネルがどの地域でも有用だとは言えません。そこで、空間情報や地理情報を活用するんです。そういった情報があれば、その地域の気候条件や斜面、遮蔽物を考慮して、実際にソーラーパネルを導入した方がいいかどうかを検討できます。

研究会内の各プロジェクトでは実際に存在する事例をもとに研究しているので、必ず実践の場があります。

そこで、自分たちが立てたプランや仮説が正しいかどうかについて、実社会で実践や実験することで証明できるんです。そうやって自分たちのアイデアを試しているとき、私たちは逆に試されてもいるんです。「本当にデータ通りにできるの?」「そんなにうまくいくの?」ってね。だから、ちよつとやってみた、じゃなく、真剣に取り組む必要があります。

——検証が失敗した場合はどうしたらよいのでしょうか。

自分が持っていた仮説を検証してみても、それがダメだった、というのは、それはそれでいいんです。重要なのは検証をきちんとすること。机上で議論して発表するだけでは研究プロジェクトとは言えないね。アイデアを思いついたら、人にインタビューしたり、現地で実験をしたりして、検証を行います。その結果、

適切ではなかった、というのはOKなんです。

——カリキュラム上で定められている研究会の時間には具体的に何をされているのですか。

研究会の時間の使い方は学期によつて異なりますが、春学期は研究会とは別に空間情報を扱うスキルを習得してもらっています。実際に自分たちの研究で使うかどうかはともかく、みんなに一定のスキルを身につけるように言っています。なぜこういうことを言うかというと、空間情報のスキルを身につけると、物事を空間だけではなく、実は時間と空間の二つの軸に沿って考えられるようになるからです。もちろん、空間情報を操るスキルを持つていることは良いことですが、それだけでは研究にはなりませんし、現場に行つても何も分かりません。重要なのは、スキルを取得する過程で得られる物の考え方や捉え方なんです。たとえば、「環境」とは抽象的な概念ではなく、実在するものだという実感が沸いてきます。

今年の春学期はデイベート形式で進めました。「農地がソーラーパネルになつていいのか」、「震災復興地域に高い防潮堤が必要なのか」、「モングルの遊牧民は首都ウランバートルに集まつていいのか」という三つのテーマについて三チーム、それぞれ「イエス」、「ノー」に分かれてデイベートしました。とても熱戦ですが盛り上がりました。

秋学期には輪読をすることが多いです。ただ操作や活動しているだけでは、自分がやっていることにどのような理論背景があるのかは分かりません。そこで、自分のやっていることを裏付けるために知識や理論も学んでもらっています。英語と日本語のテキストや論文をみんなで読んできて、それらを自分なりに説明してもらつて、足りない部分を私が解説して、みんなでディスカッションします。もちろん、資料はすべて研究会のテーマに関わるものを選択していますが、それぞれ違う角度からアプローチしているものを選ぶようにしています。

——研究会を通じて、学生になつてほしいですか。

自分はこれが好きだ、というものをもつと見せてほしいですね。最近のSFC生は研究会を授業のひとつとして捉えているような気がします。昔は研究会は必修ではなかったから、各研究会のテーマに本当に興味を持つていない人しか来なかったよね。大学の四年間つてあつという間に終わつてしまうので、友達をたくさん作つて、自分が考えていることについてとことんみんなとディスカッションをしてほしい。そういうことをして初めて、いい仲間や学びが得られると思います。



上山 信一

(うえやま・しんいち)

総合政策学部教授

専門は経営戦略、行政改革、地域再生

——研究会ではどのようなことをしていらっしゃるのでしょうか。

私はビジネス研とパースペクティブ研の二つの研究会を持っています。ビジネス研の方は、学生がグループを組んで、いろいろな会社の戦略のコンサルティングを実際にやります。先学期は野菜の宅配のオイスックス、駅などで鍵のコピーや靴の修理をするミスターミニット、携帯端末の教育サービスのクイックパー、子供服・女性服のメーカーのフェフェ(fafa)の四社。今期は3M、キツザニア、GEヘルスケア、そして化粧品通販のティーエージェントです。

研究会では相手先の会社のことを「クライアント」と呼びます。各チームは毎週、クライアントの経営者と社員、そして私と打ち合わせしながら調査する。学期の前半は、既存の商品と事業の評価をします。後半はお客さんへのインタビューなどから課題を見つけ、最終的には社内でも気付いていなかったような新しい改善の可能性や将来の戦略を提案し

ます。

お金はもらわないけれど、やっていること自体はコンサルティング会社とあまり変わりません。ただし、コンサルティング会社なら事業全体のビジョンを考えたりするので、私たちがもつとテーマを絞る。でも、中間報告や最終報告のプレゼンテーションは正式にしますし、そこには社長や役員も出てきてくれます。クライアントは軒並み「学生チームでもここまでできるのか」と驚いてくれます。

もう一方のパースペクティブ研では、社会哲学や思想の本を読んで、ディスカッションをします。これは私が在米時代に参加したアスペン・インスティテュートというシンクタンクが主催する経営者合宿セミナーから着想したやり方です。そこでは各自がアリストテレスやルソーなど古典のエッセンスをまとめた分厚い冊子を事前に渡されて読んで議論しつつ、過去の偉大な思想とその後、世界のあり方を考える。これを

二週間、集中的にやるのです。

アスペンのセミナーは政治家や社長などの経営者の育成が目的です。マーケティングや財務なら勉強と実務でなんとかなる。しかし社長や政治家の仕事は組織の大きな方向性を考えることです。そのためには、世界経済の展望、民主主義のあり方、といった大きなことを考える力が必要です。パースペクティブ研は、学生のうちからそうした歴史観や社会に対する展望を磨く目的でやっています。そのために若いときからの読書と対話を習慣付けていく。

具体的には、プラトンの『国家』やエンゲルスの『空想から科学へ』のような、歴史を変えた古典を毎週読んで、各自が感想文を書いてくる。最初のうちは一、二枚分くらいの感想文を書くのがやっとだけど、慣れてくると、長文の書評を書いてくる人も出てくる。授業中は、グループごとにディスカッションやグループ対抗のディベートをする。

毎学期に読む本はテーマに沿って決めます。今学期のテーマは「資本主義の暴走」。個人の欲望追求は社

会の活力の源泉だけど、いろんな対立や環境破壊も起こします。資本主義の暴走もその一つです。歯止めとしての民主主義が機能していないのも問題です。それに対する答えとして社会主義があつたけれど、機能しなかった。だとしたらどうするべきか。検討の成果は今秋のORFの初日午前中のセミナーで発表しました。

ビジネス研とパースペクティブ研は一見まるで違うことをしているようにだけど、実は深くつながっています。どちらも経営者や先導者を指す人には必要なスキルです。実はどちらも経営系なのです。

—— 今までの経歴を教えてください。

大阪生まれ、大阪育ち。大学は京大法学部に行きました。そして鉄道マニア。学生時代は政治研究会というサークルをやっていたので「統治機構」を見てみたかった。それで、卒業後は国家公務員になって運輸省に入りました。入省三年目に政府派

遣でプリンストン大学の大学院に行かせてもらった。戻ってからは外務省に出向してアフリカ援助などを担当していて楽しかった。でも、これからは規制緩和の時代だし、自分自身を民営化しようと考えて、二十八才のときにマッキンゼーに転職しました。そして十四年の間に製薬会社からテレビ局まで二十社の経営改革やリストラ、M&Aを手がけました。

やがて九八年頃、橋本龍太郎政権の行政改革がはじまります。すると経営改革の手法を政府の改革に取り入れようという動きが出てきて、あちこちから声がかかりました。それの本を書いたりして、行政経営やパブリックマネジメントと呼ばれる分野をはじめた。ついに二〇〇〇年にはマッキンゼーをやめて、アメリカのジョージタウン大学で三年間研究し直しました。日本に戻ってからは、大阪市や新潟市、岩手県などあちこちの自治体の改革をプロデュースしています。そんなわけで、世間では行政改革の先生と思われる節があるのですが、今も昔も私は経営コンサルタントなんです。

—— 学生に一言お願いします。

若いうちにとにかく海外に行ってください。できれば留学。あるいは旅行でもいい。僕の場合は高校時代にワンダーフォーゲルをやっていた、もともと旅は好きでした。今まで九八カ国に旅行しました。アメリカに二回住んだので、カリブ海や中南米に旅行するチャンスが多かったのです。

ところで「本を読め」、「勉強しろ」、「就活しろ」と言われても、ピンとこない人って多いと思う。何をやるにしても没頭しないと楽しくないわけです。若いうちは、そもそも没頭する対象が分からない人も多いはずです。でもやりたいことがはつきりせずにモヤモヤするのは若者の特徴。そして特権なんです。そういうときこそ海外に行つて、しばらく生活してみるといい。外国にいと、単に毎日生活しているだけで大変な刺激を受ける。言葉は通じないし、ごはんも口に合わない。でも、若いうちは柔軟性があるから、いろいろやっているうちに、現地でガール

(ボーイ)フレンドを作ったり、お金を稼いだりもできる。気が付くとずいぶんたくましくなっている。ただ何をしたいのか分からない人は日本を出てみるといい。そこから何かが見えてくるんじゃないかと思う。

sfcism

vol.02

SFCの卒業生や現役の学生のなかには、知る人ぞ知る人たちがいる。
このコーナーでは、ユニークな活動をしている卒業生や学生を特集する。
今回は日本のトップチェスプレイヤーであり、総合政策学部卒の小島慎也さんにお話を伺った。



小島 慎也

(こじま・しんや)

2010年度、総合政策学部卒業
現在はフリーのチェスプレイヤーとして活動中

——簡単に経歴を教えてください。

僕がチェスに出会ったのは、中学校に入る直前です。受験が終わってから、自宅のパソコンに入ってたフリーソフトのチェスを見つけて、それではじめました。中学校に入ってみたら、チェスの部活があって、それからは本格的に取り組みました。高校二年生のときに初めて全日本のチェス大会で優勝して、三年生のときも優勝しました。それをきっかけに、もっとプレイヤーとして頑張ろうと思って、チェスを高校卒業後も、その先も、続けることを決めました。SFCについて知ったのは、僕の四つ上でSFCに入った先輩がいたからです。その先輩がいなかったら、SFCという名前すら知らないままだったかもしれないですね(笑)。

——大学時代は何をしていらっしゃったのでしょうか。

二年生のときにチェスのサークルを作って、その活動が一番大きかったですね。チェスサークルは昔から

慶應にあつたんだけど、ずっとメンバーがいなくて、それを復活させたんです。ただ、サークルの部屋は日吉にあつたから、卒業まで三年間ずっと日吉で活動していました。

実はチェスの世界にはハイレベルで切磋琢磨するような場所があまりなくて、月に一回くらい大会がある他は、基本的には一人でやらなきゃいけない。今はオンライン対戦もできるし、一人でもプレーの研究ができる。だから、サークルを作るまではずっと一人でプレーの研究をしていました。

研究会(ゼミ)は佐々木三男先生(環境情報学部教授)の研究室にお世話になりました。佐々木先生が體育會(体育會)バスケットボール部の顧問であることもあって、體育會の学生が多かつたんだけど、僕はチェスはスポーツ競技だと思ってるから、彼らと話すのはすごく楽しかつたです。日本だとなかなか首をかしげるところだと思いますが、ロシアだと、チェスはスポーツだという認識があつて、チェスの試合結果がスポーツ新聞に載るんです。佐々

木先生は僕のその価値観を認めてくださつて、研究会に入れてくださつた。いろんな競技をしている人たちと競技ごとにどういう悩みや考え方があるのかを話すのはおもしろかつたですね。

——今は何をしていたらっしゃるのでしょうか。

チェスの仕事でやっています。というのは高校のときから決めていたから、高校の終わりから基本的に仕事はチェスのことばかりです。チェスのレッスンをしたり、教室みたいなものを持つていたこともあつたり、原稿や本を書いたり。大会の賞金もあるけれど、今はまだまだ金額としては大きくはないですね。チェスの仕事でできることはなんでもやっています。難しいのは自分もプレイヤーとしてもっと勉強すべきことがあるということです。後輩の指導をするためには、自分が強くあり続けなければなりません。ただ、そうやってチェスの仕事を自分でつくつていくということ自体

が自分の仕事であるとも思っているんです。チェスつて将棋や囲碁と比較すると、プロになつても収入が安定しないし、ほとんどの人はチェス以外の仕事をメインにしています。

ただ、誰かがチェスでも生きていくような働き方を見つけないと、後輩たちがまたそれで苦労するわけです。だから、今の自分がチェスの仕事を見つけないと、最終的に後輩や他にチェスをやろうと思つている人たちにとつての道標になつたらいいなつて思つてやっています。もちろん、それは単に自分がチェスをやつてやっていたいだけなのかもしれません。

——つまり、単に競技者としてだけじゃなく、さまざまな形でチェスに関わつていらつしやる……？

まさにそうです。はつきり言つて対局だけやつていいんだつたらそれは楽なだけで、少なくとも今はチェスという競技のマネジメントなんかもひつくるめてやつていけないといけません。なぜかと言うと、代わ

りにやつてくれる人がいないからだから、自分でやれることはできる限り全部やらなきゃいけないんです。

——SFCの学生やSFCを目指している高校生に向けて、アドバイスなどありますか？

四年間つて長いようであつという間だから、やりたいことは早めに見つけるのが大切だと思います。僕の場合はそれはチェスでしたが、それが決まるまでは四年間いろいろ試行錯誤して、自分がやりたいことを見つけて、それを究めるのが大切だと思います。

When I was young

学生にとって、教員はどこか遠い存在である。
しかし、そんな教員にも学生だった時代がある。一体どのような学生生活を送り、
それは、その後の人生にどのような影響を与えたのだろうか。
本号では、環境情報学部の岩竹徹教授に若かりし頃を振り返ってもらった。



ハーバード大学の卒業式にて

岩竹 徹

When I was young

——先生はどんな学生時代を過ごしたんですか。

大学は慶應の工学部機械工学科だったね。数学と物理と音楽とは切り離せないものだと感じていたし、むしろ、芸術系の大学などに行つて、音楽だけをやることの方が違和感があった。そうして工学部に入ったはいけれど、音楽ばかりやっていいね。学校に行つても友達と音楽の話ばかりしていたから、僕は慶應が好きだったこともあつて、五年間いたんだよ(笑)。

だけど、大学に入るもつと前から作曲をはじめていて、大学に入った頃には、現代音楽のスタイルでオーケストラの作品を書いて、それが演奏されたりしていたから、作曲家としていけるんじゃないかと思つていただけね。

そんなわけだから、大学のときに、特にサークルには入つてなかつた。何しろ暇がなかつたからね。オーケストラの曲を書こうとしたら、巨大な譜面をページ書くだけで一日かかっちゃう。僕にはそれが楽しかつた。

た。

大学院からはアメリカに行つた。きつかけとしては、高校生のときに、当時の最先端の音楽を紹介するイベントがあつて、それがめちゃくちゃおもしろかつたんだよ。アメリカから現代音楽の作曲家が大勢やつて来て、代々木の国立競技場で三日間コンサートをやつたの。人間の脳波を直接増幅して音にしちゃうとか、いろいろな電子音楽とかがあつて、興奮したね。大学まで、僕はまだ普通の楽器のために音楽を書いていたんだけど、卒業する頃、この先もまだまだ探究すべき世界があるなと思つた。コンピュータで音楽を作れるということは既に知つていたから、これからはその方面に挑戦しようかと思つていたんだけど、日本国内どこを探してもそんなことができる所がなかつた。アメリカには、四つか五つくらいだったけど、あつたんだよ。それで、ああ、アメリカ行くしかなんじゃないと思つて、行つたんだけどね。

修士はイリノイ大学、博士はハーバード大学に行つた。イリノイ大学

では、コンピュータを使いはしたけれど、コンピュータが音を出していたわけではなかつた。つまり、一種の人工知能だよ。作曲を行つて、それを楽譜に書くわけだ。イリノイに行くことを決めたまきつかけは、さつき言つたイベントに当時のイリノイ大学からジョン・ケージ等の作曲家が来ていたこと。そのうちの一人が僕の習つた先生なんだけど、大学院に行くときその先生に直接手紙を出して、あなたにどうしても習いたいんだと言つたら、ああ来いよつて返事が来て、行っちゃつたよ(笑)。

そんなもんだよ。それで、ハーバードに行くことになつた経緯なんだけど、イリノイ大学はすごく広大でキャンパスに飛行場なんかもある。だから、シカゴから飛行機で直接行けたりする。それはいいのだけれど、キャンパスの外は一面トウモロコシ畑で、あんまり文化の香りがしなかつた。それで、ドクターを取るまでにはやつぱり何年もかかるじゃない。僕はずつとトウモロコシ畑の中で過ごすのかと思うと嫌になつて、文化の香りがする

ポストンとか、全く違う雰囲気のカリフォルニアに行きたくなつた。それで、ポストンにはハーバードやMIT(マサチューセッツ工科大学)があつた。ただし、ハーバードではコンピュータ音楽をやつていなかった。一方で、MITの方ではコンピュータ音楽をやつていたし、そのメツカでもあつた。カリフォルニアにはスタンフォード大学があつて、こちらでもコンピュータ音楽をやつていた。だから、どつちにしようかと考えていたんだけど、イリノイの先生に、お前、カリフォルニアなんかに行つたら、サボつてばかりで全然勉強しないだろうから、ポストンに行けつて言われたんだよ(笑)。行けつて言われても、受かるかどうかは分からなかつたのだけど、試験を受けてみたらハーバードに通つて、そこに行くことになつた。幸いな事に、ハーバードとMITにはアカデミックエクステンジという制度があつた。これは、先生や学生が両校を行ったり来たりできる制度なんだけれど、それを活用して、ハーバードとMITの両方で勉強していたわけ。

——音楽に関心を抱くようになったのはいつ頃からですか。

それは、本当にもう子どもの頃からだよ。僕が生まれたのは戦後六年目くらいで、その頃はいわゆる高度成長の時期だった。それで、我が家にテレビや洗濯機、それに冷蔵庫が来たのが小学生のときで、そういったものが来る前から家に巨大なステレオが置いてあった。おふくろさんが好きだったのだけれど、ピアノ曲やオーケストラなんかのレコードがいつばいあって、そういうのをしょっちゅう聴いていたみたいだね。だから、はつきりとしたぎっかけがあるわけじゃないんだけど、自然に好きになったという感じかな。

——学生時代の経験で、その後の人生に大きな影響を与えたものはありますか？

やりたいことをやろうと考える習慣が身についたことかな。日本にいたとき、僕は親戚中から変わり者扱

いされていたような気がする。当時の僕の親戚には、いわゆる一流企業のトップクラスの人が何人かいて、そういう人たちは紳士的ではあるけれども保守的だった。子どもにピアノを習わせたりはするけれど、身内から芸術家が出てくることをそれほど快くは思わない。それで、僕はあんまり覚えていないんだけど、いろいろと語録があるらしい。僕が中学生くらいるとき、おじさんに、シヨパンっていうすごい人がいるんだけど、シヨパンは僕が作ろうと思つていた曲を先回りして全部作っちゃったんだ、と言つたそう。それで、こいつはちよつと変わつていて、うことになつて、いくらなんでも自惚れ甚だしいとかなんとか、いろいろ言われたわけ。こっちは本当にそう思つていたのにな。これにはけっこう傷付いた記憶がある。こんなふうに、日本にいと、人と違つていとそれを直せと言われる。だけど、アメリカに行くとは全然違ふんだよね。アメリカでは個性は尊重されて、それをもつと伸ばせ、やりたいことをやれと言われる。僕自身は全

く変わつてないのだけれど、日本とアメリカで全く反応が違う。あれはおもしろかつたね。

——若い頃のこと、今でも後悔することや、やり残したと感ずること、はありますか？

多分、後悔することはいっぱいあるのだけれど、そういうことは忘れちゃうんだよね。だつて、やつてしまったことをよくよしても仕方ないし。そこから何か学べることがあれば、それでいい。僕は、失敗するのが人間だと思つているからね。なんだろう、もう少し人間ができていればよかつたとは思ふよ。そうしたら、最初に結婚した、金髪で背の高い美しい女性と離婚することもなかつただろうし。だけど僕は、基本的に自分のやりたいことを中心に生きてきているから、やり残したことはあまりない。最近では、やりたいことをほとんどやつてしまつているから、次に何をやるか悩んでいるくらいだよ。

——生まれ変わつても、今と同じ職業に就きたいですか？

違うものになりたいね。やつぱり、芸術家かな。もちろん、大学の先生も悪いものじゃない。一番大きいのは、生活の心配をしなくてもいいということ。僕の知り合いのデザイナーで、大学教員になつた人がいるのだけれど、彼がおもしろいことを言つていたよ。バーベキューに呼んでくれたのだけれど、彼が、自分は今バーベキューをしているけれど、こんなことしていてもちゃんと給料が入ってくる、なんて言つていて、その言葉に実感が伴つていてこっちは思わず笑つちやつた。でも、そうだよなと思つたよ。デザイナーだけで食つている場合には、いろいろなクライアントと話をしたり、図面を書いたり絵を描いたりして、それでなんぼ。つまり、先端で生きていく芸術家というのは、なかなか生活が成り立たないわけ。僕も、海外で生活してはいた頃にずつとそれをやつていたのだけれど、結構しんどいものがあった。そういう意味では、大学の

When I was young

先生は理想的だよ。結局、僕は安定した生活を求めて大学の先生になることを選んだけれど、内心忸怩たるものがあつた。だつてやつぱり、アーティストとして生きて行きたかつたからね。こんなこと言うと、他の先生に怒られてしまうかもしれないけれど、作家として生きている人と文学を教えている人とは、作家の方が圧倒的にかっこいいでしょ。でも、創作と研究を両立させている教員も多いので、そう単純な話ではないけどね。

—— SFC の学生に向けて、一言お願いします。

自分のやりたいことを恐れずにやるうという事だよ。時々、職業が目的になってしまっている人や、この科目を取ると、どういうところ就職が有利ですかとか訊いてくる人がある。でも、そうじゃなくて、自分の探究心の赴くままに誠実に自分の人生を生きていきなさいと言いたい。その結果、どこに行こうかというじゃん。どこに行こうかそれはそれ

で、みんな楽しめると思うよ。他に生きていく方法なんてあるかな？ だつて、それ以外だと、他人の人生を生きることになってしまうからね。

あと、大事なことは運だね。僕には、ここぞというときに運がいいなと思つた経験がたくさんある。さも偉そうに、自分だけの力でいろいろやつてきたような話になつてはいるけれど、全然そんなことはない。運と度胸だね。一度しかない人生でしょ、誰にも遠慮はいらないよ。危ないと思つたときには、助け舟がぱつと出てきてくれるものだよ。心配するな。心配は人生の敵だとシェイクスピアも言っている。その通りだよ。それに彼は、心配したことの九割以上は実際には起こらないとも言っていると思うよ。何かやれば、文句を言ってくるやつが出てくるだろうけれど、まあ、あんまり気にしないことだね。自分を信じて、自然体で、傲慢にならず誠実に頑張つてほしい。僕もこれからもつと頑張ろうという気持ちになつて来たよ。



岩竹 徹
(いわたけ・とおる)

環境情報学部教授
専門は作曲、コンピュータ・ミュージック

加藤寛先生追悼のことば

加藤寛先生がお亡くなりになり、政府税調会長時代の活躍、経済政策や公共選択などの学会活動などは、すでに数多くの報告が出ている。SF Cの創設に関わり、初代、総合政策学部長のことについても触れられることも多いが、ここでは、八七年から九〇年までの開設の準備時代のことを、改めて加藤先生の業績として記しておきたい。加藤先生の『慶應湘南藤沢キャンパスの挑戦』（一九九二年）も初期のSF Cのことは書かれてはいるがそれ以前のこととは多くはないからである。

開設からとはいっても、加藤先生は、八六年からの最初の一年間の検討委員会には加わってはいなかった。加藤先生に学部長を引き受けてくれと、口説きに行ったのは高橋潤二郎、井関利明両教授であった。私もその日は三田にいたが、用事があつて同席できなかった。結果を聞くと、「できるかな」といったという。解釈は、断られたと受け取る者と、「やる気十分」と受け取った者に分かれたが、もちろん、加藤先生は後者であった。ここから、それから何年かの加藤先生のSF Cへの精力的なコミットメントは始まることになる。

一年間の検討委員会で基本的な構想はできていたが、文部省の設置審に書類を出すためには、その構想を具体化し、カリキュラムを詰め、それにふさわしい人事を決めなければいけない。カリキュラムを頭に置いて、人材を手分けして国内外に当たった。加藤先生が口説いた教授は非常に多かつ

た。また、文部省への設置の説明で「文系も理工（利口）になった」という有名な言葉があるが、この時期のことである。

この頃は、精神が高揚しているので、忙しさはそれ程苦にならなかったが、時間が決定的に足りなかった。一つ一つを詰めるための設置準備の三田での会合は、週一回が、すぐに、水曜日と土曜日の二日を使うことになる。建物も棋事務所に大幅な設計変更を申し込んだり、通りに名前をつけたり、建物にギリシャ文字を当てはめたりと、さまざまなことをこなしした。埋蔵文化財というやつかいなこともあった。

私に加藤先生を「日本一高給な運転手」と呼んだのは、この時のことである。というのも、議論を切り上げられるのは午後十一時を過ぎて、そろそろ終電が怪しくなる頃だった。「曾根君、送ろうか」と声をかけてもらう日が多くなり、加藤先生のご自宅近くの三軒茶屋駅まで送ってもらう回数が増えたのである。

学部長になってからの加藤先生は皆さんご存じの通り、誰よりも雄弁に、SFCの構想、理念を語り、マスコミの注目を引きつけた。加藤さんがあそこまで言うのなら本当だろうと思っただ人は多い。当時は政治改革の真つ最中で、私も何度も政治家にSFC改革とその成功の話をしたことがある。「新しいもの好き、ネアカ、樂觀主義」のSFCの特徴を加藤、相磯両学部長を思いながら説明したことがある。

加藤先生の遺作になった『日本再生最終勧告：原発即時ゼロで未来を拓く』（二〇一三年三月二十一日発行）に寄稿させていただいたことは、望外の幸せである。ご冥福を祈りたい。

曾根泰教（政策・メディア研究科教授）



加藤 寛（かとう・ひろし）

経済学博士。慶應義塾大学経済学部教授を経て、1990年より1994年まで、総合政策学部初代学部長。その後、千葉商科大学学長、嘉悦大学学長の任にあった。2013年1月逝去。享年86歳。

おつかい

いまでも鮮明に思い出せる光景がある。「新学部検討委員会」が発足した一九八六年。ぼくは、三田で大学院に通っていた。ある日、「新研」一階の会議室に入ったことがある。会議室の並びには学部長室があつて、なんとなく近寄りがたいようなエリアだった。部屋に入ると、高橋潤二郎先生をはじめ、数名の先生がたがテーブルを囲んでいた。先生におつかいを頼まれて、タバコを届けただけなのだが、いま思うと、それが「新学部検討委員会」のメンバーによる、インフォーマルな集まりだった。（『未来を創る大学』の言い方を借りると）「これはと思う、保守的でない人びと」ばかりが、会議室にいたのだ。

何が話題だったのか、何のために集まっているのか、その時はよくわからなかったが、先生がたがとても楽しそうだったことを記憶している。楽しそう、などと言うと不遜な気もするが、とにかくその印象が強かった。集まっていた先生がたの所属（学部）がちがうことは見てすぐわかったし、会議室でありながら、のびやかな空気があつた。あの楽しそうな会議で生まれたアイデアが磨かれ、その後の道のりを経て、実際にかたちになったのだ。開設の、さらに五年前から、生まれくるSFCの姿を見ていたということだ。

二〇一三年二月。病院で、先生と話をした。その日は、だいぶ体調が良さそうに見えて、いきなり「病院の食事は美味くないんだ」と、おつかい

を頼まれた。病院の廊下を歩きながら、三〇年近く経ってもおつかいをして
いるじぶんが、なんだか可笑しく思えて、涙が出そうになった。病院の
脇にあるコーヒーショップに行つて、お目当てのサンドウィッチをさがし
たが、すでに売り切れだった。ジュースだけ買って戻り、しばらくのあいだ、
ジュースを飲みながら先生と話をした。

いま手がけているあたらしいカリキュラムのこと、「未来創造塾」のこと。
研究の話をしていたはずなのに、知らないあいだにSFCの話題になつて
いた。先生は、ぼくが考えていた未来の話を、おそろしく古いものである
かのように聞いていた。ベッドの脇には本がたくさん積んであり、ネット
で買おうとしていたのか、本のリストも傍らに置かれていた。もちろん、
SFCのことは気にかけていたはずだが、先生は、もつともつと大きなこ
とを考えていたにちがいない。

あたらしい知が生まれ、実体をともなうかたちで目の前に現れてゆくプ
ロセスは、いつでも楽しいはずだ。そして、そのプロセスに立ち会うため
には、勉強を怠つてはならない。SFCを支える精神は、「たゆまない自己
の再編成」なのだと思う。大いなる夢を闊達に語り、ひたすら学ぶ。その
ための「場所」が必要だ。

二〇一三年三月。大学の卒業式の日、訃報が届いた。その日は、SFC
にとって二〇回目の卒業式だった。キャンパスがきちんと「成人」に育つ
まで、先生は見守ってくれていた。雲ひとつない、青空だった。

加藤文俊（環境情報学部教授）



高橋 潤二郎（たかはし・じゅんじろう）

経済学者、地理学者。慶應義塾大学経済学部教授を経て、1990年より環境情報学部教授を務めた。SFCの創設に大きく貢献し、慶應義塾大学理事としても活躍した。2013年3月逝去。享年77歳。

28: sfcism

Some graduates and students are well known to few, for their unique activities. We interviewed Shinya KOJIMA, a professional chess player, who graduated from Faculty of Policy Management. He talks about his collage days, mostly playing chess, and through his experiences, he explains the difficulty of being a professional chess player and his thoughts toward it.

30: When I was Young

To students, a faculty is somehow distant and far. But even they had a time when they were young students. How has their student life effected their life after graduation?

In this volume, we interviewed Professor Toru IWATAKE of Faculty of Environment and Information Studies. Professor is a specialist in music composition, and he talks about how he met computer music in his life. He also mentions about the difficulty of making a living as a professional artist or musician.

34: A Memorial Writing for Hiroshi KATO

36: A Memorial Writing for Junjiro TAKAHASHI

Hiroshi KATO and Junjiro TAKAHASHI passed away on January and March this year. Hiroshi KATO is a well known economist who promoted the activities of SFC and also served as the first dean of Faculty of Policy Management. Junjiro TAKAHASHI was also an economist, and he became a professor of Faculty of Environment and Informational Studies. He is famous for working as a director of Keio University.

38: Abstract SFC REVIEW 53

40: From Editor

Abstract SFC REVIEW

Table of Contents

53

02: 53

04: Lab x Lab

In SFC, there are quite a variety of research fields and there are unique students whose research extends beyond these fields. At the same time, even within one research field, there are different research techniques, and ways. How do the labs from the same research field whose technique differ think about each other? What are their similarities and how are they different? Through this topic, we aim to seek for possibilities of collaboration beyond the different labs within SFC.

In this volume, students of architecture, management, sociology, and cognitive science labs discussed their thoughts with each other.

18: New Comers

In this volume of KEIO SFC REVIEW, we would like to introduce two new professors who has joined SFC from this year. Associate Professor Satoko OKI is a specialist for earth quakes. She focuses on spreading the knowledge of seismology, and how to act during disaster occasions.

Professor Kenji WATANABE is a doctor, but he is specialized in both "European" and "Japanese" medical science. He explains about the importance of "KANPO", japanese traditional medical science, along with why it is needed in modern society.

24: The Neighbor Laboratory

In SFC, a place where everyone can study freely about all kinds of things, seminar is the core of the curriculum. Students learn the wide world of academics through each class, and deepen them in their seminars. Of course, picking which seminar to join is an important decision that one has to make. In this volume, we interviewed Professor Shinichi UYAMA and Professor Wanglin YAN about their seminars.

Professor Shinichi UYAMA has two seminars related to his profession, corporate strategy. In one seminar, he takes his students to companies and by actually experiencing corporate strategy making, he teaches the techniques for corporate strategy. For the other seminar, students read classic books of social science, and learn about the mind of leaders.

Professor Wanglin YAN is a specialist of GIS, a technology to visualize time and position data. In his seminar, his students research about a specific problem in urban and regional areas regarding sustainability. His biggest aim is to make the students test the validity of their ideas in real world.

発行人

奥田 敦 (湘南藤沢学会会長)

編集長

藤吉 賢 (環境情報学部3年)

副編集長

川井 祐樹 (総合政策学部2年)

編集スタッフ

秋野 太郎 (総合政策学部3年)

武藤 真理子 (環境情報学部2年)

加藤 葵 (総合政策学部2年)

宮崎 翔太郎 (総合政策学部1年)

佐藤 響子 (環境情報学部1年)

湘南藤沢学会

KEIO SFC REVIEW 担当幹事

堀 茂樹 (総合政策学部教授)

事務局

田坂 真美

From Editor

最近、僕の周りで、「もう取りたい授業がない。時間割をただなんとなく埋めている」ということを言う人が増えました。SFCは幅広く学ぶことに主眼を置いているので、自ずから一分野あたりの授業数は減ります。ただ、そのおかげで自分が今まで知らなかった分野の授業を取り、自分が普段学んでいることの意外な特徴を見出したり、自分の学びにも転用できそうな概念を手に入れたりできるのだと思います。

今回の対談でも、同じ分野で研究活動をしている人たちが対話することで、それぞれの立場が明確になり、その分野の本質が顕われたのではないかと思います。対談者の方々にも好評でしたので、この対談企画は今後も継続していこうと考えています。

こうした対話の場を普段からSFCにもっと多くつくれば、もっと日常的に学生がお互いを高め合うような気風が醸成されていくのではないかと思います。寒い冬、自分が勉強していることを友だちと熱く議論するのはどうでしょうか。

53号編集長 藤吉 賢 (ふじよし・けん)

発行日

2014年1月15日

発行所

慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県 藤沢市遠藤 5322

0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>gakkai@sfc.keio.ac.jp**製作・印刷**

株式会社ワキプリントピア

〒252-0815 神奈川県藤沢市石川 6-26-19

0466-87-5811

<http://www.printpia.co.jp/>

無断転載・複製を禁じます。

ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。

KEIO SFC REVIEW は学生編集スタッフを募集しています。
興味のある方は、gakkai@sfc.keio.ac.jp までご連絡ください。最新号およびバックナンバーをご希望の方は湘南藤沢学会まで
ご連絡ください。

